

「善意の文学」の陥穽：中島健蔵の昭和10年代

松下，奈津美

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

71

(開始ページ / Start Page)

44

(終了ページ / End Page)

53

(発行年 / Year)

2005-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010065>

「善意の文学」の陥穽

——中島健蔵の昭和十年代——

一、はじめに

中島健蔵は、専門としているフランス文学の分野のみならず、日本の文学者・知識人らが組織する諸団体においても大きな活躍をした。昭和九年（一九三四年）に評論「懷疑と象徴」を著し、言論人として「デビュー」を果し、一知識人として、以後日本文学界で様々な批評・評論を展開する。中島は太平洋戦争開戦と同時に白紙徴用^{（注）}され、マレー、シンガポール地域へ赴くこととなり、現地の人々への「日本語」普及に努めた。本稿では、彼が「文壇」に登場してから徴用されるまでの彼の言論を検討し、どのように中島が「戦争」と、それに突き進んで行く時局に向き合ったのかを論じていきたい。それにより、「一文壇知識人」として、次第に軍国主義が高まっていくなかで戦争をどのように受け止めたか、さらに、中島の戦後の言論・言動

松下 奈津美

の傾向が明らかになると同時に、日本の知識人が戦争状態にどのように取りこまれていったのかということも見えるはずである。

ところで、日本の敗戦後、戦中のことについて語る作家は多くいるが、中島健蔵も多くの記録を残した。彼のライフワークとも言える『回想の文学』（全五巻、昭和五二年・平凡社）をはじめとして、多くの雑誌や新聞紙上で、昭和十年代を振り返る作業が、彼自身の体験を語ることによって行なわれた。そもそも、中島が「自分史」を書き残したのは、金芝河弾圧に対する日本ペンクラブの態度^{（注）}がきっかけであった。加えて安岡章太郎が戦前のペン倶楽部の批判を展開した際^{（注）}、誤解がある、このままではいけない、と中島が痛烈に感じたためでもある。すなわち、戦前のペン倶楽部を知るものとしての「使命感」に駆られていたということが主な端緒である。よって、昭和初年代から日本の敗戦までを書いた『回想の文学』執筆などの一連の作

業は、中島自身の「自分史」であるのは当然ではあるが、「中島健蔵」という日本の知識人を代表する人物が回想を書くという行為には、昭和初年代から昭和二十年に至るまでの日本知識人の思想や言動の動向がかなり含まれ、どちらかというと「自分史」を残すというよりは、戦後かなりの時を経てからの回想に、昭和十年代の彼自身の「証言」による語り直しとしてのニュアンスが含まれている。つまり、彼自身の回想というよりも、歴史の語り直し作業である。この論考では、自分を語ることによって戦前のペン倶楽部をはじめとする日本の文壇の状況を語ることもしくは総括することになるという自負にも近い行為を批判するだけではなく、中島が戦前について語った『回想の文学』を史実と照らし合わせ、回想のなかで曖昧に書かれている部分について検証し、中島が当時、どのような壁にぶつかっているのか、どのように問題を解決していったのかを検討していく。更にそれは必然的な「伏線」として、徴用後の彼の言動にもつながっていくことにもなる。

二、中島健蔵の「善意の文学」

本稿を進めるに当たり、『回想の文学』一巻から順を追って検討していきたい。その前にまず、『回想の文学』についてだが、当時の日記と回想がない交ぜになった形式の「回想記」であり、青年時代の昭和初年から昭和二十年までを振り返ったものであることをここで確認しておく。

中島健蔵が東大仏文科に入学したのは大正十四年で、三好達

治、小林秀雄、今日出海らと同期である。当時は、辰野隆が助教として教鞭を執っていた。中島は学部課程が修了すると、大学院へと進み、フランス文学、特にポール・ヴァレリーの翻訳を手がけ、その頃から訳書を多く出版しはじめていた。傍ら、『仏蘭西文学研究』（大正十四年・昭和五年、全九輯）という雑誌の編集に携わる。『仏蘭西文学研究』が消滅した後、それを継承するように、『季刊文芸評論』を中島の手で編集することとなった。東大院を修了し、助手として働きはじめる昭和五年頃から中島は徐々に、公の言論活動に携わっていくことになる。たとえば、昭和六年の『作品』に載せられているヴァレリーの翻訳や、同年十月に発行された『書物春秋』（月刊非売品）のなかの、「書物の問題」という文章などが挙げられる。この頃から中島はメモ風の日記の中で「善意の文学」という言葉を用い、自らの文学に対する姿勢を固めることに努めている。「善意の文学」とは、宮澤賢治の影響を受けた中島自身の言葉である。少々長くなるが、引用する。

宮沢賢治の一生は、文学を包みながら文学を超えて、まさに生きざまの問題をわたくしにさしつけてきた。ほかに、自然科学その他の領域に深いかかわりを持つ文学者は大ぜいいる。(略) それらのいとなみが、渾然と一つの流れとなり、詩となつてかがやききらめいた、というのは特別なことである。これは、自分としては、生きざまの理想の実現のように感じられた。何よりも決定的だったのは、徹底した「善意」の力であった。(略) 人間の善意などは、三文の値うちも認められないような世相であった。文学の

評価にもそんな調子が強かった。わたくしは、心ひそかにそれに反撥していた。宮澤賢治を知るにおよんで、わたくしは、わたくしなりに自信を回復した。「善意」を強調すれば、軽んじられるにきまつている。それをおそれずに、押し通して生きようというのが、わたくしの決心となった。

（『回想の文学 ②』）

中島は「善意」という言葉を宮澤賢治から借りて、この言葉で「時局」・「時代」の危機を乗り越えようとしている。右記の引用は、その決意の顕われとも取れる。ここから、「善意」の「文学」へ発展していく。この四ヶ月後の日記を見ると、

ここにいう「善意」とは、いわゆる「意志」ではない。動機でもなく、倫理評価の規格でもない。「関心」（オキユバシオン）の、ある状態を指す。もちろん「無関心」とか「悪意」とかに対立するものだが、探求の目的は、実は、関心の状態にある。それを「あるがまま」の形で、対象化せずに探求することを目的とする。（『回想の文学 ②』）

と、「善意」についての中島なりの解釈が展開されている。「善意」という言葉は、中島が少なくとも戦争中頃まではかなり意識していた言葉である。証拠に、『回想の文学』中、文学を続けて行く事が厳しくなっていく時代において、確認するかのように「宮澤賢治だったらどう考えるか」と宮澤賢治の思想と照らし合わせようと試みる。中島にとって、宮澤賢治は、時

代を客観的に鑑みる材料となっていたのかもしれない。

一見誰からも非難されないような、便利ではあるがしかしその実体はまるで掴みどころのない茫たるものとして、今われわれの眼に映るこの「善意」の文学は、戦争前に、「リベラリスト」、「自由主義者」をもつて、自他ともに認じていた中島にとり、大きな意味を持つ言葉として今一度検証しておく必要がある。

ここでわれわれの疑問は当然にも、中島によって「善意」を仮託された「文学」そのものと、「善意」であることを求める当時の文脈と、双方に向けられる。すなわち、前述の日記にしばしば登場するこの「善意」という言葉は、中島がどのように文学を捉えようとしているのかということと同時に、錯綜と混乱を窮めた昭和十年代の知識人の「乗り越え方」——アポリアを問うものとして考えることが出来るのである。

未明、断乎たる決心をする。要するに今日まで長い間考えてきた「徹底的善意」の追求に誤りはない。誤りがあつたとしても、もはや後へはひけない。いよいよ残つたのは実行だ。おそらく、僕の希望は実現可能だ。（略）できれば、一人の幸福が、周囲を犠牲にすることなく、必ず周囲を照らすような幸福を、積極的に作りあげること。（『回想の文学 ②』）

これは昭和九年の日記中の文章であるが、かなり強い調子で書いていることがうかがえる。しかし、本文そのもののほか、

この前後の文脈を読んでみても、「善意」が中島にとって具体的に何を指すのかが示されていない。先ほどの日記からしても、「意志でも倫理でもない」のだが、確実に言えるのは、「善意」を「積極的」に尽くすという彼のこの信念は、この後の中島の行動を左右するということだ。

三、中島健蔵と「自由主義」

ここで、回想記の補強のために当時の文学、思想的状況について述べておきたい。衆知の通り、昭和八年には小林多喜二が虐殺され、プロレタリア文学が徹底的に弾圧された一方、五月には、ナチスの焚書事件が起こっている。これにいちちはよく抗議したのは、ドイツでもフランスでもなく、日本の知識人であった。^(注四)同年七月、ここから徳田秋声を会長とする「学芸自由同盟」が結成された。これは明らかに日本の知識人らが自主的に表明した日本初の反ファシズム運動と考えて良いものである。だが、この運動も「文芸懇話会」^(注五)の出現によってわずか一年で消滅する。期を同じくして、小松清が「行動主義」をフランスから輸入する。もともとフランス文学に精通している中島は、小松から「行動主義」についていち早く情報を与えられ、「理論的には賛成」と「回想の文学」のなかで表明している。「行動主義」運動は、小松・舟橋聖一・青野季吉が中心となって展開された。このなかで、青野は、「能動的精神の台頭について」(『行動』一九三四・一一月号)のなかで、「行動主義」を、「知識人の高い精神的自由を樹立しようとする欲求と

か、新しい自由主義の原理をうち立てて、それを行動の指針としようとする欲求とかのうち」と紹介し、この具体例として横光利一の『紋章』を挙げている。『紋章』については、当時の知識人の雰囲気をよく観察し、書いているという評価を中島自身もしている。^(注六)ちなみに、『紋章』の主人公のモデルは河上徹太郎だといわれており、小松の見解では、横光の作品が日本における「行動主義」を体現した文学を代表するものとされる。その『紋章』を書いた横光の視線の先には、河上のほか、中島が映っていたのである。事実、当時の二人は毎日のように良く会っており、横光は中島に宮澤賢治を紹介したほか、中島に次のように進言した事がある。

小林(秀雄)、河上(徹太郎)の世界と、一般文壇の世界との間には、大へんな空白がある、そこを暴れまわれという。また、「通俗にして非俗」の問題をもっとはつきり書けという。(略)「やはり文壇を動かさなければだめだ、そうでないと文壇に動かされる結果となる。」これも一種の「能動的精神」であろう。(『回想の文学』②)

この「能動的精神」とは、前述の青野の文章を借りると、「正直にそれ(「能動的精神」を指す、論者注)を発揮することによって、社会の進歩的な動向に積極的に参加することが出来る」ものとされている。ここに、中島がのちに回想する「当時のわたくしは、『紋章』の山下久内のように、疑い深く、非行動的になっていた。頭が空回りをして、どうにもならなくなっ

ていたのである。^(注七)

とが重なってくる。ここで改めて横光が使った意味での「文壇」を問わなければならない。さらに、横光は、小林・河上の世界と一般文壇との空白をどのように捉えていたか、また、「空白」の意味するものは何かという問いを投げかけられるのではないか。当時「頭が空回り」していた知識人たちは、時勢をじっと観察するかのように、いわゆる「文壇」の中に入ってはいかなかった。横光が指摘した「空白」とは、河上・小林が「文壇」や「文壇」に鎮座しているような長老などにくつてかかるような行為を示しており、その間を中島に暴れる、ということと解釈できる。しかし、中島は、この時点では、そういった意識はなく、とにかく自分の居場所がなかった状況ではなかったか。でなければ、「空回り」という言葉などは出ずに、「能動的精神」を実践する方向へと「積極的」にすすんだはずであろう。

だが改めて考えた時に、後世の「自分史」作成において、横光との対話が登場するのは、「文壇」そのものの再検討を経ずに、エピソードとして「紹介」されているのは、中島にも「文壇」が染みついている、自己批判の視点が失われていることを意味する。当時、中島や横光らは意識しなかったが、しかし確実に存在している「文壇」がここに露呈している。横光は、中島に河上・小林の間と「文壇」の間という言葉を用いたが、河上・小林も含めて「文壇」内にいるということに彼らはあまりに無意識でありすぎた。結局、ここで用いている「文壇」とは、小さなコミュニティの「ギルド的」、もしくは「心境告白的小

説」を書く「既成作家」を指しているのであろうが、ここには明示されてはいない。が、中島の場合に限って言えば、「文壇」を特別カテゴライズせずに「なんとなく」ではあるが「しっかりと」日本の「文壇」に根を張るようになっていった。次第に時流が戦争に進むにつれて、中島の言動も曖昧な言い回しが多くなっていく。

やがて中島は『回想の文学』で、行動主義を次のように批判する。

舟橋聖一の「能動的精神」と、小松清の「行動主義」との結びつきについて、わたくしははじめから疑問を持っていた。フランスでの「行動的ユマニズム(ヒューマニズム)」は、(略)文学運動とは次元がちがうものであった。舟橋の「能動的精神」が、日本の文芸界の、あまりにも情緒的、身辺的、非行動的で、社会問題や政治への無関心がひどすぎることに對する不服の提唱であり、警告であり、意思表示であるとするれば、それはわたくしにも賛成できた。ところが(略)舟橋は、「エリート意識といえはいるが、ほくは能動精神で、インテリゲンチヤこそ新しい社会変革のイニシアチブをもたなければいけないということを考えた、」といっている。そうなると、文学運動とは次元がちがってしまう。小松清が持ち込んだ行動主義は、文学者や思想家など、非行動的だった人々の行動宣言ではあったが、思想や芸術の運動ではなかった。(『回想の文学』②)

といっている。「はじめから疑問をもっていた」というなら、なぜ「はじめ」に言わなかったのか、という疑問が逆に生まれてしまうが（後になって言うのが彼の常套手段なのであるのかもしれないが）、ここでは元来、フランスから入ってきた行動主義そのものを批判しているというよりも、日本に輸入されてからの「能動的精神」を批判している。文学運動としての日本での「行動主義」は、結局、「理論」が単に「能動的精神」という言葉に置き換えられ、「能動的精神」というこの字面だけが宙に浮き、日本には根付くこと無く実現不可能なものとなつてしまった。言ってみれば、日本での行動主義は「空中分解」してしまつた感がある。だが、この後も中島が言論活動を続けるなかで、「善意を持つて」、「積極的に行動」していこうとすることは、すなわち「空中分解」してしまつた「行動主義」をたえず意識し、その実践を試み続ける一方、その批判者ともなり得る二律背反の状態を意味している。

四、戦争までの言論と「文壇」

前章でも「文壇」について論及したが、少々詳しく中島健蔵と「文壇」について考察する。中島は、昭和九年に「懷疑と象徴」を発表するのと平行して、精力的に日本文学者と交流するようになってゆく。昭和九年に会つたと中島本人が言っている作家を挙げると、河上徹太郎、小林秀雄、永井龍男、青山二郎、横光利一、今日出海、久保田万太郎らが挙げられる。当時、日本の「文壇」に良かれ悪しかれ何らかの影響を与えてい

たであろう人物ばかりであり、そうした人々と交流する事が、回想を見ると、中島にとっては有益であり、彼らの名前を記す作業に悦びをもつて日記を記しているのではないかという印象を受ける。

昭和十年にはいると、『回想の文学』の中には、より多くの日本文学者の名前が挙がりはじめる。そこには、毎日のように「文壇」御用達料亭「はせ川」へ赴き、作家らと歓談することが多く書かれ、昼間は東大や法大での講義の内容などが多く書かれており、「文士」と「教授」の、まさに「二足の草鞋」を履くような生活が描かれている。東大仏文の友人関係のほか、「文科」、「作品」、「文学界」の同人、加えて「はせ川」で知り合つた作家等が中島の「文壇」交友関係を濃いものにし、日本文学系の文芸雑誌に多く寄稿するようになった。このことを裏付けるかのようだが、この頃、中島にとって文芸雑誌の座談会が増えたのと同時に、文芸家協会に入会、すぐのちに評議員にもなるほどであった。このほか、中島の昭和十年代の言動を自ら公表するものは全て、「誰と会い、誰の作品を読み、どこの雑誌で座談会をし、どこの団体の委員会、会合に出席した」という形式がかなり多く登場する。そして、回想記から見て取れることは、中島は、日記を後世に紹介することで、「善意の文学」という言葉が代表するように、自己の正当性（先ほどの引用でも、「善意」は倫理ではないと言っているが、「悪意」の裏返し）の言葉としては正義、もしくは正当性という言葉は有効だろう）を「告白」し、時代の正鵠を穿っているのだという説得力をつけようと努力している。中島の言動は、いつの時代でも

反駁の標的にされることは少なかったし、彼自身「知識人」。「文壇」の間で揺れながら、文芸評論を公表していた。自己保身的と言ってしまうえば辛辣ではあるが、こうした彼の挙動は、場所や時を選ばずして、一見進歩的かつ自由に振る舞っていたし、中島が手探りながらも模範的「文士」としての立ち居振舞いを念頭に置きながら、戦前、戦中、そして戦後を過ごしていたと考えられる。このことが、中島が「善意」の「文学」に対して託したことと並列の関係にある。

五、戦争まで

昭和十年（一九三五年）三月二三日、衆議院における「国体に関する決議」が可決され、中島はこの可決こそが戦争に向かって走り出す第一歩だという認識を今後一貫して持つことになる。この後からはいかに文学的立場を取るか、政治と文学の在り方について考えをめぐらせるメモ書きが多くなってくる。そして、自身も「政治的になった」と自覚する文章が見られる。ちなみに次に引用する文章は、昭和十四年、「昭和研究会」に出席するようになった時のことである。

正しい意味の合理主義を逆行させようとする右傾の流れに対しては、抵抗しなければならない。しかし、左翼エリート式な教条主義では神がかりの盲信には勝てない。いっそ、そういういざこざからのがれて、方丈の庵に引っこもうとしても、事態は、それを許さないところまで来て

いる。（『回想の文学』②）

「我々は、ただ、漫然と生きているつもりでいながら、周囲の空気に抵抗を感じず。歩度をゆるめてみても、その抵抗はへらない。走れば倒される。そして、やむを得ず立ちどまつたところに、かえって、行動感が生れそうになつたりする（つまり非協力だ）。……」これは、すでに進行之つたある国全体の右翼化の流れの中に生きるわたくしの自画像であった。（『回想の文学』②）

引用した文章は、時流が右傾化していく中で、どこに中島自身の文学的スタンスを決めるか、また、「善意の文学」を実行させるがため、組織の中に汲み取られんとする個人的な「抵抗」とも読める。昭和十年代に突入し、次第に戦争へと進む状況下で、彼自身の言論もいよいよ切迫してくる。当時発表された「自由主義」に関する文章もかなり曖昧であり、渡邊一民は『近代日本の知識人』のなかで、「一年四ヶ月のあいだに、中島の文体が何よりもよく暗示しているように、語られる場そのものが本質的に変わってしまったという」、「（「自由主義」という）おなじ事柄を語ることが、どれほどのぬきさしならぬ危機意識と勇気と決断を要することだったか、わたしはやはり考えずにはいられない」と中島の文章の曖昧さを同情的に捉えている。たしかに特筆に価するほどこの頃の中島の文章は曖昧であるし、当時の検閲などの状況から察しても、危ない橋を渡りながらの作業であつたとはおもう。

これまで、日本の「文壇」の中に身を投じ、中心で安泰することに奔走してきた中島が、今度は次のようなスタンスを取るようになる。

わたくしは、やがて来るに相違ない文化統制に対して、上からの官僚統制の圧力のままに動かされていたら、大へんなことになるとわかっていたので、そういう組織運動に接触しながら、体当たりの防衛に当る決心をした。すでに既成の事実として、ペン倶楽部の常任理事、文芸家協会の評議員、(当時の体制では、評議員会は、戦後の理事会のような機能を持っていた。)[文学界]の同人、昭和研究会文化問題研究会委員など、それまでは、重荷と感じ、たえず脱出を考えていたような自分の関係を、積極的に活用する決心をした。『回想の文学』④]

これは、昭和十四年の日記であるが、次第に国家の言論統制が厳しくなっていることを物語っている。厳しい検閲の下、どの作家も作家として生き残って行く方法を問われており、中島は、「組織に身を委ねることによって身の安全を守る」、つまり合法的な組織にさえ入っていれば、言論の場が失われる危惧が少なくなり、そこを積極的に、徹底的に身を埋めていこう、と考えたと読み取れる。ただ、「それまでは、重荷と感じ」ていた各団体組織に関する活動も、回想記を読む限りでは、特に重荷と感じているような文章・言動はない。引用でも出てくるペン倶楽部に関してだけ言えば、当時「満洲」占領で国際ペンク

ラブから孤立を余儀なくされていた日本ペン倶楽部の常任理事を引き受けたのは、当時常任理事であった勝本清一郎が京都の検事局からペン倶楽部を辞めると強要され、その後任を引き受けたという経緯がある。回想記を順に読んでいくと、先述した昭和九年頃から、中島のペン倶楽部に対する態度は、多少消極的とも取れるが、外国人作家などが日本に召喚された際などは積極的に参加していたし、多少なりとも組織との関わりを持っていたようだ。直々に常任理事の後任を依頼した勝本にしてみれば、これまでの活動を認めた上でこそ中島に後任を任せることができたのであろう。これまでも「善意の文学」を貫くという態度で臨んできた中島だが、改めて「積極的に(組織を)活用」ということにどのような意図が含まれているのか。

政治を嫌いながら、だんだん政治に巻きこまれて行く。政治の一ぱんいやなところは、条件的に表裏があり、必然的に皮相的な表現をとることだ。しかし、いまのままで、は、われわれの表現も、やむをえず皮相的になっている。こういう時に、文学が成功するとは思えない。従って、こちら、皮相的なところで、まず皮相そのものを破る努力が必要になっている。皮相を皮相と知りつつ、ほんものの扱いで押して行くことによって、皮相が皮相でいらなくなるようにするのだ。『回想の文学』④]

これは昭和十三年十月二十一日の日記である。中島にとって、「善意の文学」を守るということは、政治的なことから距離を

取るべきだということと捉えて良い。言ってしまえば、中島は文学よりも政治の方が格段に蔑むものの対象であり、忌みするべきものと捉えているようだ。それでもなお、自らの文学的立場を守るために、政治に加担していかなければならない自分の立場を恨めしく思っているということだ。

しかしこの心理は、一方において「文学」を非政治的な「善意」としてあり得るものとし、他方、機会によって伸縮自在な文学者の「良心」を可能にする。しかし中島が、政治的と組織の問題を、自分自身の内にある文学の問題と同質のものとして捉えてはいないことは、先の「文壇」のくだりでも明らかである。だから中島は、「善意の文学」の実践を、状況に左右されながら、「文壇」内政治的組織の活動に依ってでも果そうとする。中島の企てる「善意の文学」は、宮澤賢治をたよりに得た「中島流・政治と文学」の対立への「解答」ともみてとれるが、それは実践的には「厭政」的な気分を背景にした時局への適応策である以上、真の意味での政治批判を意味・保証するものではない。この「善意」はむしろ、爾後あらゆる局面において彼の「文学」と行動とを巧妙に保証するのに役立つものとなる。

この後、昭和十五年には国家により昭和研究会の解散を強制され、同時に、大政翼賛会文化部設置が行なわれる。翼賛会の部長には岸田国士が就任するが、この人事も、岸田を推した三木清から中島は相談を受けている。戦後、公職追放となった岸田に対して、中島は自責の念を持ったことを告白しているが、翼賛会発足当時とはかく「言論文化」を守りたいという一心

で、岸田を城壁代わりとしたということも併せて告白している。だが、岸田の防波堤も、押し寄せる言論統制の波を跳ね返すこともなく時流に飲まれてしまう。前述の通り、党派性を意味する政治を忌み嫌う中島だが、その中で取り込まれつつ個人の文学を実践し、守ろうとする行為は結果的に、文学を守るためには党派性を帯びている文学の組織にも関わりを持つて、たとえその組織が戦争に加担していくこととなっても、自らの文学の場を守りさえすれば、つまり自分の文学がピュアなようでありさえすれば、自己の良心が満たされてしまうことになる。日記を読む限り、中島は昭和十七年にシンガポールに徴用される直前まで、文学的思考にさして変化が見られないのは「善意」という文学的立場がある程度達成されていたからなのではないか。

六、「善意の文学」の陥穽

これまで検討してきた通り、中島健蔵はかなり積極的に「行動」し、「実践」を意識する人間だということが浮き彫りとなった。自らの選択、または依頼され、各職能団体の役員などを引き受け、昭和十七年、八ヶ月に及ぶ徴用時代に至っては積極的にシンガポールで「昭南日本語学園」の運営、指導にあたり、とかく言論よりも行動で「文学」を実践していた。「昭南日本語学園」においての活動は別の場所で論じる予定だが、「占領者」として、現地の人々に日本語を積極的に普及した行為は、やはり昭和十年代の彼の行動・言動に源流がある。つま

り、党派性を嫌いながらも、組織の中でイノセントに生きていくことにより、彼の実践としての「文学」＝「善意の文学」は保持される。よって、彼の「善意の文学」はどこまでも無傷なのである。

「善意」を否定しはしないが、しかし、「善意の文学」は、中島にとってあくまでも文学を実践する上での「掛け声」、「スローガン」的な役割を持つものであり、昭和十年代を「善意の文学」という言葉を掲げて「文学」を「実践」、「行動」し尽くしたところに、「善意の文学」の陥穽はある。

注

一、一般に、微用される際に届くものを「赤紙」と読んでいたのに対して、「文士微用」された者には「白紙」で届いたので「白紙微用」と呼んでいる。

二、韓国の抵抗詩人、金芝河が朴政権（当時）によって弾圧されたことに対して、日本ペンクラブ代表は、韓国まで出向き、金氏死刑判決の助命嘆願をした。その際、ソウルでの記者会見で日本ペンクラブの代表者は、「金氏の有罪判決は言論弾圧とは言えない」と発表、この発言により日本国内で厳しい批判を浴びることとなった。有吉佐和子をはじめとするペンクラブ脱退、続いて緊急理事会では、記者会見の発言は「個人的見解」とし、日本ペンクラブの公式見解を否定、責任の所在を曖昧にした。（参考：『回想の文学』①）

三、『朝日新聞』九月四日の夕刊に出た安岡章太郎の『ペンクラブと「自由」』という寄稿を読んだのが、わたくしの回想執筆

筆のきっかけになったのである。」とある。（参考：『回想の文学』①）

四、『自由主義』の項に関しては、渡邊一民『近代日本の知識人』（一九七六年、筑摩書房）を多く参考にした。中島健蔵も『回想の文学』執筆するのと同じくして本書が発行され、「わたくしの回想の裏づけ」として、時々引用させてもらうことになる。（『回想の文学』②）と大きく評価している。

五、松本学が中心となって結成。言論の官僚統制が目的であったと中島健蔵は『回想の文学』のなかで回想している。

六、『文芸読本 横光利一』（一九八一年、河出書房新社）のなかの「紋章」をめぐって（中島健蔵、一九五三・一二）から。

七、同・注六。

八、この当時、中島が何らかの関わりを持っていた団体名を挙げると、「国策研究座談会」「農山村文化協会後援会」「文芸中央会」「文芸者会」「昭和研究会」「日本ペン倶楽部」「日本編集者会」「東亜新秩序研究会」……などがある。

（まつした なつみ・国際日本学インスティテュート博士
後期課程一年）